ヘト、唐人ハ戒タリ、

〔賤者考〕青樓、忘八、女衒、肝煎、町役、髪結、番太郎の類多くあるべし、くつわは傾城遊女をかゝへおく親方といふものなり、傾城のことは既にいへり、さて此親方といふものと青樓と別なるもあり、京島原、浪華新町の廓など是なり、祇園町邊などにては、忘八を置屋といひ、青樓を呼屋といふ人共に兼たるもあり、江戸の新吉原など其他多くありとぞ、吉原ももとは別なりしも□□年間より今の如くなりて、引手茶屋といふ者、中之町又廓外にもあり、中之町の茶屋もとは青樓なりしとぞ、

〔異本洞房語園上〕京都遊女の名目○中略

局女郎　勤銀貳拾目　局の構樣は、表に長押を付、局の廣さ九尺に奥行貳間、或は貳間半、亦横六尺に奥行二間にも造る、入口は三尺、表通りは横六尺のうづら格子也、中闕と庭との堺に貳尺計りのまがきを付る、但外より内へ入候へば左の壁際也、うづら格子への通ひに、幅貳尺計、長三尺の腰かけ板有り、入り口にかちん染の暖簾を懸け、のれんの縫留に紫革にて露を付る、右局の指圖を記す事、詮なき事なれども、元祿年中より局といふはすたり、總て吉原の古風取失ひし事多ければ、後々若輩どもの爲に是を記し申候、

〔洞房語園異本考異下〕本說○異本洞房語園に、元祿年中より局といふ事廢り、總じて吉原の古實ども取失ひしと歎きてあり、其頃より散茶造りになりたるか、當時の遊女屋の造り、どれも〳〵散茶造りなり、むめ茶作りさへ廢してしる人稀なり、近き頃まで、江戸町一丁目巴屋源右衞門が家作り、むめ茶作りにて有りしが、表總格子にして、廓は壁の方と跡尻の方と、二方に女郎並び居て、籬の方にギウ同座す、其籬と表の格子との間に、三尺ほど明て、落間有り、ギウ臺より出入す、偖客人格子にて女郎を見立て呼ぶ時に、ギウ落間より來りて、客に應對して、客人をば其格子の並びに木